

〈解答〉

- ① 1 イ  
2 エ  
3 いずれのとき  
4 夜のこと  
5 〔例〕 波音の荒い場所が浅瀬である (13字)

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

①

「常山紀談」は、江戸時代中期、湯浅常山によって著された、二十五巻から成る軍談書（合戦を題材とした短編集）。戦国時代から江戸時代初期くらいまでの、合戦の場における武将の行いや言葉などが、簡潔な和文により、およそ四百七十話収録されている。

1 傍線①の直前に、「山ぎはの海べを通るに、『潮満ちたらむや、はかりがたし』」（＝山ぎわの海辺を通るのに、『潮が満ちているのかどうか、推測できない』）とあるのに注目する。つまり、干潮であれば安全に通行できるが、潮の干満がわからないため、このまま軍勢を進めるべきかどうか、大将の宣政が決められずにいるということである。

2 傍線②にある「いかにして」は、手段・原因・理由についての疑問をあらわす表現で、「どうやって」「どのようにして」という意味である。

3 古文の中に出てくる「ぢ」・「づ」は、「鼻血（はなぢ）」、「縮む（ちぢむ）」、「三日月（みかづき）」、「続く（つづく）」といった現代語でも使われている場合を除いて、すべて「ぢ」→「じ」、「づ」→「ず」に直す。

4 空欄④の直前に、「これも」とあることから、これ以前に、同じ状況が出てきていたことがわかる。空欄④の直後に、「暗さは暗し」とあることから、第二段落の内容も、第一段落と同じく、「夜」に軍勢を移動する時の話であると推測できる。

5 傍線⑤の直前にある持資の会話文の最後に、「波音荒き所を渡せ（＝波音の激しい場所を渡らせよ）」とあるのに注目する。持資は、同じ会話文の中の和歌を思い出して、「水の深い場所ほど水音は大きくない↓水の浅いところ〔浅瀬〕ほど水音が大きい」ということに気づいた結果、このような命令を出したのである。

〔大意〕

上杉宣政という武将が、下総（＝現在の千葉県北部と茨城県の一部）に軍勢を進めた時のこと、山ぎわの海辺を通るのに、「潮が満ちているのかどうか、推測できない」と考えて、（軍勢を進ませることに）危険を感じていた。ちょうどその時は夜のことであった。（宣政の家来であった）太田持資は、「それならば、私が（海の様子を）見てまいりましょう」と言って、（海のほうに）馬を走らせ、すぐに帰ってきて、「潮は引いています」と言った。（宣政が、「どのようにして知ったのか」と尋ねたところ、「遠くなり近くなるみの浜千鳥鳴く音に潮の満ち干をぞ知る（＝遠くなったり近くなったりする鳴海の浜千鳥の鳴く声で潮の満ち引きがわかるのである）」と詠んだ和歌がございませう。（海辺では）千鳥の声が遠くに聞こえました（ので、この和歌を頼りにして、干潮であると判断したのです）」と言った。

またいつのことであつたらうか（それとは違う時のことであるが）、軍勢を引き返していた時のこと、これも夜のことであつたが、利根川を渡ろうとしたところ、あまりにも暗く、浅瀬がどこにあるかもわからない。（しかし、）持資は再び、『底ひなき淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあだ波は立て（＝水の深い場所ほど水音は大きくないものである。川の浅瀬こそ、たいした風もないのに波が立つのである）』という和歌がある。（だから、）波音の激しい場所を渡らせよ」と言って、（川の向こう岸まで、軍勢を）無事に渡らせたのである。